慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』 (第二十四ー三十章) (翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres XXIV-XXX), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.81 (2025. 10) ,p.216 (13)- 228 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20251031-0216

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

 この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』

（第二十四～三十章）（翻訳）

山本武男

訳者まえがき

二〇二五年四月、退院し、復活祭の日曜日の務めを果たしたその翌日、ローマ教皇フランシスコは帰天された。その葬儀の後、教皇選挙（コンクラーヴェ）が実施され、新教皇レオ十四世が選出された。その様な歴史的な出来事が繰り広げられた折も折、当翻訳は今回、小説の主人公ジェルヴェゼ夫人が復活祭の式典等に参加する姿が詳細に描かれる辺りに差し掛かった。発達障害の幼い子供を持つ、フランス上流階級の婦人である彼女は、ある罪の意識と共に、息子と二人、そしてまた女中を一人連れて、パリからローマに移り住んだ。哲学書などを愛読する内向的性格の彼女は、視覚的効果を重んじるローマでのカトリック信仰の実践の在り方に違和感を覚える。それと共に彼女特有の心霊主義（スピリチュアリスム）的傾向が内部に兆し始める。徹底して宗教行事の模様を活写して行くゴンクール兄弟の筆は、現場報告（ルポルタージュ）をも想起させ、後の二十世紀の報告文学・記録文学の先駆とも見られ、また現代のドキュメンタリー、

ノンフィクションのジャンルにも繋がる視点・手法があるとも看做されよう。本作は、近代社会に於ける信仰の問題に正面から取り組んだ、現代にも課題を投げ掛けて来る作品である。

二十四

この歌、この声は、えも言われぬ消え入る様な苦悶に満ちた音で終わりを告げ、ゴルゴタの「何ゆえ我を見捨てしか」はジェルヴェゼ夫人に末永き反響を残していたが、その振動は、彼女の存在の感じやすい部位で身震いを惹き起こし、唇にまで震えが昇り来て、その為、その唇を通して、ごくひっそりと至上の溜め息を繰り返していた。そして同時に、あの内なる記憶と共に少しずつ、彼女の人生のあらゆる苦しさ、内に秘めたありったけの彼女の涙が沸き起こり、ぶり返して来るのが感じられた。思い出の苦い至福と共に、少女として、妻として、母として感じた悲しみのすべて、女として日々抑圧して来た、内に秘めた人知れぬ苦悶のすべてが思い出されていた。泣くが如きヴィオロンの弦の上の、遠いハーモニーの憂鬱な歓喜の中で、自分の来し方が近付いて来ている様に彼女には感じられていた。それは昔の自分の動揺を思い出すかの様で、心臓がはち切れそうな程、自身が嘗て感じ、押し殺し、耐え忍んだ事が彼女の記憶に甦って来ていた。然も宗教的な、信仰に似通う何物も、ジェルヴェゼ夫人の中では、その音楽が彼女の内面に引き起こした完全に女性らしい感傷的な、繊細にして深いこの感覚には、混じていなかった。

そして甘美にして残酷なこの状態の中で殆ど幸せだった彼女は、そこから抜け出す為の努力を一切払わなかった。彼女は体を少しも動かさず、黙々と想念を巡らす事で、心地よい悪夢を保ち、それを引き止めようとする様に、その状態に身を委ねていた。正にそんな心境で、彼女はシスティナ礼拝堂の「憐れみ給え」を耳にするに

至ったのであった。

二十五

システィナ礼拝堂の中で「哀歌（ラメンタチオ）」はその沈痛な音を高めていった。祭壇に向かって右側にある、三角形をなす褐色の蠟の十五の大蠟燭は、故人の通夜を営む際のその小さな炎を細かく震わせていた。恐ろしい色彩によって捏（こ）ね繰り回された、怒りの壁は、背景には地獄へと勢い良く転がり落ちて行く沢山の劫罰を受けた人々を貼り付かせており、転落を描き出す遠近短縮法、不安に満ちた筋肉描写、苦悶が見える輪郭線、絶望する者らの裸体と云ったそれらの総体が、彼らの責め苦を表していた。肉体の苦しみを表す物言わぬその絵に対し、魂の苦痛を籠めた聖歌隊の声が衝突し、次々と打ち当たっては消え去って行った。

合唱の歌声は止むことが無かった、——轟（とどろ）く声部。唱句に乗せて、棺の上に地上の重苦しい物音を浴びせ掛ける声部。高く優しい声部。掠（かす）れ行く、澄んだ声部。溢れ出る涙で、声高になった声部。互いにその周囲で、舞い上がる声部。震える呻（うめ）き声が上がったり下がったりする、哀れっぽい声部。悲愴な声部。単旋律聖歌（カントゥス・プラーヌス）の嵐の様な激しさが齎（もたら）す熱い思いの籠った、哀願の声部。悲しみの母音唱法（ヴォカリーズ）に於ける、震える声部。激しい神への渇仰を表す声部が突然、沈黙の深淵に落下し、そこからすぐに迸（ほとばし）り出た他の響きの良い声部。奇妙で気掛かりな声部、フルートの様な高ぶった声部、子供とも女ともつかぬ声部、男性による女性的な声部、天使の様な声変わりが喉の中で作り出すらしい掠れた声部、性別の無い中性的な、純潔にして殉教を思わせる声部、音の思い掛けなさと自然に反する感じによって神経に障る、弱々しいが胸を刺す様な声部。

その間、長く間隔を置きつつ、各々の詩篇歌の終りに、三角に並べられた大蠟燭が、自ずからそうなるかの様

に、一つ、また一つと消えて行っていた。すると、背景なす絵の恐ろしい混沌は、闇の混沌と混ざり合い、聴衆も見分け難くなったが、人々は「内陣の仕切り」の柵に擦り寄りつつ甚く密集し、余りに狭苦しかったので、聖職者らはその人込みの中で、彼らの「聖週間」の頁を舌で捲ったりしていた。

最早、僅かな明かりが回廊席の、右側の壁の、書見台の上に張り出した小さな照明を備えた、幾本かの小柱に支えられた手摺りに残るのみ乍ら、そこでジェルヴェゼ夫人は「主に向かいて歌え」を読む事が出来ていたのだった。礼拝堂内に於いて、ローマ教皇並びに枢機卿らの前で唯一歌う事を許されている、教皇聖歌隊の階上席は、グレゴリオ聖歌と所謂パレストリーナ風の音楽のみを合唱しているのだった。彼らの背後の窓からは、白い日の光が微かに通って来て、中世の春の夕暮れの日差し以て、彼らの上着のレース、彼らの通常服、彼らの帯、彼らの首元の聖職者用の襟の紫色の絹を照らしていた。そして一瞬、書見台の上を、思い出の中のミサ答えの少年たちのうち、ルッカ・デッラ・ロッビアの絵に出て来る様な、ふっくらとした頬を持つある少年の面影が過った。

イタリア時間で、二十二時になっていた。十四本の蠟燭が消され、最後の一本は祭壇の背後に姿を消した、——そして礼拝堂の暗闇の中で、待ち時間はひっそりと静まり返っていた。

そのとき心地好く、また大変低音で、「憐れみ給え」が、その囁きが、その祈りが、その呻くような調和が高まり、この消え入らんばかりの音楽が神まで舞い上がると、それはまた雲から下りて来て、時々、システィナ礼拝堂の天井で、熾天使の口からの天の返答をその耳で聞く事が出来たと云う、大聖グレゴリウス教皇のミサでの奇蹟を彷彿とさせたのだった。

二十六

夫人はゆっくりゆっくり帰ったが、扉を開け放ち、中の輝かしさを見せている教会の前では立ち止まり、そのうちの或る教会では、なおシスティナ礼拝堂の闇が少しも去らない彼女の視界がくらくらした。

丸天井から祭壇の下部の高さまで、階段状に並べられた大蠟燭のその各段の上には、蠟が輝く瀧の様に垂れ落ちていて、その背後では、赤い通常服姿（スターン）の点灯を担う聖具室係が、行き過ぎたり、戻って来たりしていた。そして壁や付け柱には、大理石と金で出来た豪華かつ洒落た教会全体を通して、——ポルトガル人たちの聖アントーニオ（サン・タントーニオ・デイ・ポルトゲーズィ）教会であるが、——無数の枝付き飾り燭台、天国への梯子、列柱、天井から吊り下げられた三角形燭台らが煌（きら）めき、内壁を反射する炎の鏡と化させ、それらに映る結晶と化した火影（ほかげ）からは、ルビー色の閃光を放射させており、真っ赤な光が幾つものダイヤモンドの様に輝き、星々の様に華やぐその明かり、そのはためく微光の瞬（またた）きの中で、見返れば沢山の照明、内陣の、石造りの帷（とばり）に挟まれ、外光に照らされた薔薇窓（ばらまど）は、その中の奥底で「神の栄光」の眩（まばゆ）い扉が開かれる様に思われて来るのであった。

二十七

聖土曜日、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂の内部で、ジェルヴェゼ夫人は、ローマの田園地帯の民衆が、その野生動物を思わせる信心によってそこに齎（もたら）す荒々しい信仰の光景を目の当たりにした。長い杖を持った物乞いの老人の頭と背中によって少し持ち上げられている重々しい帷（とばり）を過ぎると、背後にいた人波が彼女を、

ネッカチーフを口の両端で軽く噛んでいる女性たちの只中へ、縄底（エスパドリーユ）で布製の靴に足の指で穴を開け、紐で縫い直した上着と半ズボンを身に着け、汗が発酵した様な、血の通った人間の臭いを発する田園の小部族とでも云うべき男たちの只中へと投げ入れた。階段や祭壇の段の上で、立ったり、坐ったり、肘を突き合わせたり、折り重なったりして、或る者たちはアーティチョークの葉を食べたり、他の者たちは両膝の間に頭を落として眠ったりしていた。大聖堂（バシリカ）の内部、「地域と都市の全ての聖職者の母にして命（オムニウム ウルビス エト オルビス エクレシアルム マーテル エト カプト）」と呼ばれるこの至聖の教会の内部では、黄金（こがね）色の使徒たちの像がそのすぐ下にある聖遺物箱の天井の下、その奥のぱちぱちと弾（はじ）ける様な黄金のモザイク画の下、足元の教会の昔からある絨毯を上に敷いた蛇紋大理石と斑岩からなる舗石と云う、アレクサンドリア風（オプス アレクサンドリヌム）の細工の上、大きな大理石の壁の間で、この襤褸（ぼろ）を纏（まと）った民衆は、外陣（げじん）の五つの信徒席をいっぱいにし、粗野で田舎じみ、かつ粗暴な信心の侵攻と野営の如くに映り、瞬く間の罪の許しを眼前に待ちつつ、興奮して待ち切れず、ざわめいていたが、その只中に、囁いたり、唸ったりしている告解所もあり、そこからは、そこに体を寄せ掛けている女性のスカートの間から、まずそうな食べ物を沢山入れた小箱を肌着に結び付けた子供が乱雑に転（まろ）び乍ら出て来たりしていた。

ジェルヴェゼ夫人は、誰かしら偉大な画家が、この彫刻の様な疲労、瞑想、没頭を表す姿勢を、この驚くほど無分別な信仰心を、その殆ど獣の様に茫然自失した祈りを作品にして来なかった事に就いて驚いていた。その絵の様な光景は、取り分け、女らの熱心な告白によって強く夫人の印象に残ったが、立った彼女らは口を尖（とが）らせ、告解所の銅の網に張り付かせる様にし、自身の頭の辺り近くに置かれた両手を木製の部分にぴたりと押し当てて自らを支え、凭（もた）れ掛かっていたが、それはそれら水呑み百姓の女たちが口より高く掲げた水の細い流れに口を近付ける動きを思わせた。

そして壮麗な金色（こんじき）に塗られた青銅彫刻を頂く大きな四本の円柱が立つ――アクチウムの海戦のガレー船の舳先（へさき）の青銅彫刻を思わせる――祭壇では、彼女は更に三列横隊に並んだ厳格な美しさの女たちに見惚れたが、彼女ら

は所々で、すくんだ羊の群の如く、お互いにひしめき合って密集し、跪(ひざまず)きつつ自身の踵(かかと)の上に座し、手摺りの傍(そば)で、聖餐式に思いを巡らしている様であり、或る女たちは膝の上でロザリオを爪繰(つまぐ)り、別の女らは銅製の大きな指輪が目立つその片手で額を支え、他にも激しく物思いに耽(ふけ)り、小指を口に銜(くわ)えている女らもあった。

二十八

遂にその日は、偉大なる一日、復活祭の日曜日であった。ローマ平野(アグロ・ロマーノ)の民たる農民たちは、復活祭に先立つあれらの日々に於いて、自分らのマントに包(くる)まり、広場で横たわり、階段の上に点在し、星の下で就寝しつつ、イエスの聖墓の前で眠る見張りたちに画家ラファエロが与えたあれらの美しき眠りの線と、イエスの不滅の上に建つ準備が出来ている石材を思い起こさせる姿で、その日を待ち侘びて来たのであった。

馬が耳に薔薇を刺した一台の馬車は、「復活祭おめでとう(ブオナ パスクワ)」の声する、ローマのこの宗教的、国民的祝祭の幸福な動き、物音、喧騒、庶民愛の中を通り抜けて、ジェルヴェゼ夫人を運んで行った。

彼女は群衆に満たされてもなお、何時もの様に更に人を収容出来るサン・ピエトロ大聖堂を目にし、勝利のミサを聴き、それから彼女は押し合い圧(へ)し合いして出て行く民衆に外まで付いて行った。

彼女は広場に居た。彼女の前には人々の黒装束の行進があった。大聖堂へと昇る大階段の上には男たち、女たち、貝殻を身に着けた巡礼者たち、オペラグラスを持った観光客、サビーナ地方の羊飼いら。大勢の人々の足元では、母親らがあちこちで、胸をはだけて自身の子らに授乳している。ボルゴ地区、トラステヴェレ地区、イ・モンティ地区の人々が、オベリスクの周辺で鮨詰めになり、その境界線を繋いで作っている鉄柵、その基礎部、その台座に這い上(のぼ)り、貧しい界隈の鈴生(すずな)りの貧民からなるオベリスクの台座を作り出していた。真鍮製の円錐形

の容器に入れて栗とルピナスを小売りする、「モシャレラージョ」と呼ばれる商人がその中を通る。余りに窮屈になった広場の端の方には、赤い車輪、屋根の黄金の縁飾り、金鍍金の施された車体、リボンや花を飾り結びにした馬からなる豪華四輪馬車等、盛装した数百台はあろうかという馬車の混雑、百年にはなろうかと云う古いお仕着せで度を超して着飾り、至る所、縫い目の上を紋章付きの飾り紐で飾り、昔の教皇庁の高位聖職者団や末期の宗教裁判を思わせる、非常に古く、色褪せた豪華さを誇る使用人、従僕、御者、執事の大群。奥では、教皇の部隊、竜騎兵の隊列が、彼らの鎧の胸甲の赤みがかった反射、その鉄兜の白い照り返しと共に輝いていた。そうして、周囲の屋根〳〵の上に、窓辺に、バチカンとその環状に並ぶ彫像により空を背景に聖人たちが観衆を輪になって迎えている様に見える二つの列柱の屋上にと、至る所に人々の夥しい姿が見えた。

広場はがやがやしていた。ざわつく群衆が、太陽が棚引く雲の向こうにあって未だ姿を表さない重苦しい天気の下で、熱を帯びていた。正午の鐘の音が高い所から下りて来る様に、ゆっくりと十二回響き渡り、一筋の日の光が差して突如輝き、大聖堂正面上部、一番端の開口部の小さな二つの鐘と分厚い大鐘の音が空気中に鳴り渡った。その音に、黒丸烏が軒蛇腹から飛び立った。顔を覆うベールの下にベギン会修道女の頭巾を被った病んだ老女らは、殆ど身動き出来ずに椅子に座っていたが、立ち上がらんと努めるのだった。

好奇心をそそる広大な規模の式典を前にして、群衆は動き始め、身を寄せ合い、間隔が詰まり、前方に向かって人海の波の様な動きをすると、軈て止まった。そしてそこに居る者たちの渇望する、貪る様な全ての視線が、眼差し一つに懸けて、平織物の天幕に覆われ、教皇クレメンス十一世の紋章が刺繍されたブロケード柄のビロードの緞子を垂れ下がらせた開廊の窓に期待した。

長い間、窓には誰も現れなかった。遂に、物が、一つ一つ、その窓の謎めいた闇の中で宗教的に備え付けられていった。即ち三つの司教冠、三つの教皇冠、それらは王三人分の主権者を無言で厳かに示しており、そして更

に黄金の司教冠一つに、点灯された二つの大蠟燭の間に十字架が一つ。次に、いと徳高き枢機卿たちが二人ずつ、自身の祭服の下の絹の飾り着（ダルマチカ）の薄い金色と同じような色の白色の髭を生やした司教冠を被る資格のある総大司教たち、東方帰一教会の司教たち、神に選ばれし者を連想させるそれらの高齢の人たちの後は、福者たち、尊者たち、教会博士たちが次々に現れたが、彼らは古い礼拝堂に描かれている姿の人々であり、グレゴリウスを名乗った教皇たち、アンボジアを名乗った司教たちの幻影とも見え、それらが復活したかの様な姿と共にそこを通って行くのであった。

その間、幾つかの鐘の乱打による、それらの銅の嵐の様な響きが、絶えず何時もより速く、より激しく、力いっぱい怒号を上げると、再び誰も見えなくなった窓枠の内側に、雲に似た煙の上昇と共に、孔雀の羽根を混ぜて目玉模様を散らした駝鳥の羽根で出来た二つの扇によって輝く様に包み込まれた、教皇の三重冠の先端がゆるゆると昇って来た……。すると既に、或る声が話し出し、それで人々は皆脱帽し、膝を折り曲げ、その声は大きくなるや広場の隅々までを満たしたが、それほど広場は沈黙し、その声に聞き入っていたのだった！　突然、黄金の三重冠が立ち現れ、聖父たる教皇が、その姿を見えなくしていた物、覆い隠していた本から姿を現した。そしてこの上なく壮麗にして純白のその礼服にての突然の登場により、人々は教皇に、白い後光に包まれた、不動の姿を見た……。

そのとき、厳かにゆっくりと、老いた教皇の両の手が挙げられた。それは上がって行って天国で神の加護を得て、「皆さんの上に降りたもう（デスケンダット スーベル ウォス）」の語と共に、――一瞬、空中で止まり、小刻みに震え、揺蕩（たゆた）うてから――それを全地上に撒き散らし、降り注がせる様にした。

二十九

その復活祭の晩、それまでの一週間分の、全ての疲労と感動にぐったりしていたジェルヴェゼ夫人は、外出する気力も体力も失せていた。彼女はピエール＝シャルルに、オノリーヌ同伴で、煌々と照らされた街路を見に行かせると、独り家に居残り、この大いなる一週間の事どもを思い返し、聖なる残影を半開きの瞳の先にちらつかせていた。

息子の騒がしい帰宅に、彼女は目の覚める思いがしたが、息子はお祭り気分にやや高揚し、見て来た事の話が し度くて堪らず、オノリーヌにそれを語らせたくてうずうずしており、彼女の脇腹を両の小さな拳で何度も打つのだが、そこには大人と一緒に見て来た全ての事を大人から吐き出させようとする子供らしいナイーヴな仕草が伴っていた。女中は、羽を毟られた鵞鳥がピラミッド状に堆く積まれていたり、中途半端に皮を剝がれた子羊が並べられていたり、店先で陳列商品として、月桂樹で花飾り風に飾られた腸詰めや馬の乳から作るチーズ、天井からぶら下がった豚の腿肉、カラフルな図柄と共に遠くまで帯状に並べられた豚脂と云った、ガス灯が点された、浮き浮きした雰囲気の肉屋や豚肉製品店の様子を語って聞かせた。

「ところで奥様」、突然話題を中断して彼女が言った。「……奥様はご存知の事と存じますが……ジョゼフ氏の事ですが……」

「どちらのジョゼフさんでしたかしら。ああ！　ペップの事ね……」

「左様で御座います、奥様……。それでは、奥様はご記憶なさっておられるのですね……。先日、奥様の方からと云う事で、例の勘定書の為に、私が彼にお渡しした二十フランの件で御座います……最初に彼が口にしまし

たのは、たった二十フラン硬貨一枚に過ぎないじゃないかという事でして……奥様と私の二人で一緒に貸す場面をちゃんと見ていた訳でもないとも言い出しまして……。更には、どうも確信が持てない話なので、勘定し直す必要があるとも言いました……。それで私は毎日、彼に対してその勘定の事を話題にしてやりました。すると遂に、一昨日、まだ確認する時間が取れないのですが、私の申し出は正しいに違いないとは思う、と私に言いました……。そして奥様、今日、彼は私に、あれは確かに、僅か二十フランに過ぎないのであるから、常識に反しているのは私達、奥様と私の方だと言い張るのです……。」

「それで？　何か驚く事があって？」と考え乍ら聞いていたジェルヴェゼ夫人は、微笑みつつ言った。「まあ、可愛そうなオノリーヌ、あなたはご存知ないのね……。ペップは一昨日は、告解をしなかったのですわ。全てのローマ市民同様、彼は昨日、懺悔したに違いないので、罪の赦しを得た筈なのよ……、それで私の二十フラン硬貨は最早、二十フラン硬貨にすら値しなくなったって事なのよ……」

三十

数週間続いた時空が遠ざかった事で、ジェルヴェゼ夫人の内面にあった聖週間たる、復活祭前の一週間の記憶はその殆どが、消え去ってしまった。その期間、彼女が強く感じた事はと云えば、どうやら、自身の感受性の揺らめき、体で受け止めた振動、自分の音楽好きの気質に与えられたよく響く衝撃音などであったが、同時に、不幸な経験や、確信した思想の誇り高さや、自分自身を厳しく律する女性の禁欲主義の高慢さにも原因がありそうな、狭められ、閉ざされ、圧迫された自身の本性の、或る種の綻び、解放もあった様であった。彼女は以前にも増して、自分を悲しい人として、また優しい人として認識し、その心はゆっくりゆっくりとはち切れそうになっ

て行くのだった。

が、この様に動揺させられつつも、彼女は自身の中に、屢々(しばしば)魂それ自体に結び付き始め、仕舞いには完全かつ永遠にそれを絡め取らずにはおかない、この手の初めての体験に付き物の愛着は感じてはいなかった。復活祭前・(グランド)の一週間(スメーヌ)からは、意識の秘められた奥底に於ける初めての改心の成果と言える様な事など、自分の中には微塵も萌(きざ)さなかった様に彼女には思われていた。オペラの豪華さやオラトリオの興奮に胸打たれたのは、自分の中の芸術家だけだった、と彼女はそう思っていた。

その上、ローマの人々の宗教的熱情を掻き立てる、これらの神聖な日々に於ける、幾つかの卑俗な偶像崇拝の姿は、彼女の心霊主義(スピリチュアリスム)の飾り気なく、繊細な信心を傷付けていた。復活祭直前の聖金曜日に就いては、或る記憶が彼女に怒りと嫌悪を残していたが、それらはその儘、信仰の物質性に就いての蟠(わだかま)りとして彼女の中に在り続けていた。それはコロンナ広場のとある教会での事だった。二本の大蠟燭の間、奉納の為に地べたに置かれた銀の皿のすぐ隣の、古びたベッドサイドマットの上に、黒い木製の十字架があり、この十字架の上には一体の磔刑のキリスト像があり、筋ばり、筋骨逞(たくま)しくも痩せこけ、病的な色彩で彩られていて、それは暗殺された男の血糊を塗り付けられた解剖模型を思わせるものだった。そうして周囲一面では、四つん這いになった男たち女たちが、崇められているその身体の、人ならば擽(くすぐ)ったくて震え出しそうな箇所を選んで、唇を這わせているのだった。

聖父(サン＝ペール)たるローマ教皇の姿それ自体が、サン・ピエトロ大聖堂に於いて、システィナ礼拝堂に於いて、サン・ピエトロ広場に面した開廊(ロッジア)のバルコニーに於いて、如何に高貴であろうとも、その厳かな性格は弱まり、彼女にとってはただの出会い以上のものではなくなっていた。彼女はアントニヌス浴場の近くにいた。葡萄畑の間を通る小さな道では、農民たちが雷に打たれたかの様に跪(ひざまず)いた。ラティーナ街道の小さな四つ辻では、古代の円柱に立て掛けられた錆びた十字架の傍(そば)、墓地の塀、鉄柵、四本の糸杉の梢の前に現れたのは、色白の顔に、赤い帽子

を被った人物で、三本の指を立て、それで祝福を与えた。柔和な顔、小さな黒い点を思わせる双眸（そうぼう）、大きく左右に細く引き伸ばされた口、人間の悪意を秘めた頭、それがその日、ジェルヴェゼ夫人が目にしたローマ教皇の全てであった。

（つづく）

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 122-132.